

「アラフォー」はロートルか？

クライアント先の宴席で質問を受けた。
「アラフォー世代って、もうロートルなんですか？」

相手は女性管理職。アラフォーに該当するとはいえ雰囲気は若く、まだ30代のなかばにしか見えない。

「なぜそんなことを？」と聞き返すと、部門での会議の後、彼女の叱責を受けた部下の1人が「ロートル」とつぶやくのを耳にしたのだという。彼女のことを言ったのかどうか定かではないが、だいぶ胸にこたえたようだ。

その会社はもっか急成長を続けているネット関連の会社で、平均年齢はひじょうに低い。アラフォーが他の業界ではアラフィフにあたるかもしれない。

その女性管理職がロートルかどうかは別にして、いまどきの若者がこの言葉を口にしたのことに、私はちょっと驚いた。すでに死語になっていてもおかしくない、昭和中期にはやった言葉だからだ。ついでながらロートルは、英語的な感じがするものの、そうではない。もとは中国語の老頭兄（発音はラオトウ）で、意味はそのまま老人。昔の使われ方では、頭であれ体であれ「少しガタがきた人」というニュアンスがあった。

「あなたはいまの若い人をどう思う？」

私は女性管理職に尋ねてみた。

「ひとくちでいうとクール。よい意味で」と彼女は応えた。

「たまに自慢話をすることもある？」

「そんな暇ないですよ。自慢するほどのこともないし」

「だったら大丈夫。ロートルじゃない」

私は冗談っぽく親指を立てた。

人事コンサルタント 本田 有明

最高傑作は「ネクスト・ワン」

さきの女性は該当しないと思うが、組織の管理職クラスにロートルはいる。少なからずいる、あるいはかなりの確率でいる、と言っても過言ではない。

ロートル管理職かどうかを識別するのは簡単だ。次の3点を確認すればよい。

- ①過去の自慢話をよく口にする。
- ②「最近の若者はダメだ」が口グセ。
- ③今より昔のほうがよかったと思う。

あなたはどうかだろうか。

問題は実年齢ではない。若い部下に向けるまなざしや、時代の変化に対応する能力の有無が、その人の「ロートル度」を測る目安になる。

かつて映画王と称されたチャールズ・チャップリンは、「あなたの最高傑作はどの作品ですか？」と人から問われるたび、こう答えたという。

「ネクスト・ワン」——次の作品です。

個人で行う仕事であれ、組織で取り組む仕事であれ、働く者としてお手本となる言葉ではないか。

昔の自分を懐かしく思い、過去の業績を部下の前で語りたくなったときには、すぐ両手で口をふさごう。上司の自慢話に本気で耳を傾けようとする部下などいない。

もし自分の経験から教訓を受けたいと思うなら、自慢話ではなく失敗談のほうを選択しよう。そのほうがずっと部下の関心と共感を誘うからだ。

そんな話を披露すると、女性管理職は納得したようにほほ笑んだ。そしてこう言った。

「本田さんのネクスト・ワンは何ですか？」
……(汗)